苦しい人生

田中　浩司

私は染色工場で正社員として働いていた。そこで精神病を発病してしまった。十九歳の時であった。

以前から予兆はあった。学生の頃は、あまり人の輪の中に入れないとか、手が震えるとか、尿意がすぐするとか、自分でも変だと思っていた。

会社で働いていると自分の名前を呼ぶ声が聞こえる。後ろを振り向くと皆、仕事をしていて、私の方など向いている社員はいない。そして、常にトイレに尿ばかり出しに行っていた。しかし、これといって出ないのだが尿意はする。そして尿が溜まってもだんだんと尿が出なくなってきたのだ。尿が膀胱にかなり溜まっていても出ない。これは苦しいものだ。

相変らず皆の輪の中にはまじわれず、いつも一人でいた。私が勝手に一人でいるのに、なぜか皆から敬遠されているような妄想に悩まされた。

とうとう会社には行けなくなってしまった。自分の部屋で寝ていた。会社は辞めた。一年は勤めた。

神経内科へ両親に連れて行かれて、医者からはすぐに働くように言われた。すぐに仕事をさがして正社員として勤めた。そして、すぐに辞めた。勤めたり辞めたりを二年繰り返した。

親も、これは変だと思ったらしく、大きな精神病院へ連れて行かれた。診察室を出て、家へ帰ると、母から言われた。「お父さんは、『もうお前は仕事はしないでいいぞ』と言ったよ」。私はほっとした。

精神病院の医者から入院を何度となくすすめられたが、母や犬のコロと一緒にいたかったので、医者にはいつも入院は断っていた。それからずーっと家にいた。外へ出るのはコロの散歩だけであったが、外へ出ると、誰かが私のことを憎く思っているような気がして、外へ出るのは怖くなり、コロの散歩もやめた。門を閉めっぱなしにして庭でコロを自由にさせていた。本当にコロには申し訳なく思った。

会社を辞めて六年も家に閉じこもっているのもなんか飽きてきて、そして自分の将来を思えばこのままではよくないだろうと思い、主治医に相談した。福祉作業所

へ通うように言われた。私は、市内の樫の実作業所へ通った。これで助かったぞと強く思った。

しかし、そこの福祉の職員達が私に赤ちゃん言葉、子ども言葉で話をしてくる。私も自分はダメな人間だからなんとも思わなかった。そして日本はこの頃とても景気がいいのに、一日中働いて土日は休みで、一ヵ月の給料は二千円なのだ。これも私は精神障害者だから仕方がないと思った。

今、私は五十三歳。朝一時に起きて、新聞配達をしている。休みは一年間に新聞休刊日の十回だけであるが、六年以上休まず働いている。もう私はダメ人間ではない。主治医からは、「田中さんは病気は完治したよ」と言われた。ただ予防のために薬は飲んでいるように言われ、夜寝る前に鎮静剤と精神安定剤は飲んでいる。でも、いまもなんか病気があるような気がする。差別はほとんど受けていない。ただ福祉のスタッフからは、相変わらず赤ちゃん言葉、子ども言葉でたまに葉書が届く時がある。新聞配達の給料と障害者年金三級を合わせれば、年収はかなりの金額になる。もう私は生きていける。

私は配達の仕事だったらなんでもできる自信はある。人の中にまじわることは今も苦手なので、外で一人でできる仕事なら向いている。嫌なことをするよりも好きなことを徹底的にすればどんどん自分が伸びていく。私は働くことがとても好きだ。

日本には配達の仕事がかなりある。でも、雇用には年齢に制限があるのでつらい。ただ人生というものには意味がないということも私はわかる。この世界のことは全て意味づけなのだ。日本は経済主体の国であるが、それも意味づけ。お金にも意味がある。また、あらゆる宗教も無理矢理意味をつけているにすぎない。どうして人々はこのようなことをするのかというと、それは意味がなかったら人生は成り立たないからだ。意味がなかったらわれわれは不安だからだ。

凍えるような寒さの中で今朝も配達をしてきた。一日、三時間の仕事。たいしたことでもない。「人生はうまくいっているか？　人生は楽しいですか？」と、たとえば誰かから問われたとしたら、「まったく楽しくはない。人生は苦しい」と答えるだろう。

そして私が一番気がかりなのは、自分のことよりも母のこと。母はもう八十一歳。
そのうち別れがくる。それが一番つらい。

田中　浩司

一九六〇年山梨県甲府市生まれ
一九八七年詩集「目覚めねば」
二〇〇二年詩集「詩人」
二〇一三年山梨日日新聞山日文芸詩部門優秀賞受賞
新聞配達員